

2006年12月9日

第3号

## 九条の会 金大ネット 通 信

事務局 金沢大学 経済学部 小林研究室 (264-5415)

### 一年の終わりに、もう一度

#### あの戦争とその後の60年を考えてみませんか……

私たち『九条の会：金大ネット』は、この秋の金大祭において、映画『蟻の兵隊』の上映会を行ないました。上映会には160人ほどの人が集まり、多くの人たちから感想が寄せられました。(その一部は前号に載せましたが、この号にもその続きを載せています。)

あの映画を観て、戦争や戦後の日本について色々考える機会があったと思います。折角の機会ですので、今回は、この『蟻の兵隊』として戦争終了後も中国大陆に残されて戦いつづけた元隊員の方(金沢氏在住)を招いて、戦争とその後の60年について、一緒に考えてみようと思います。多くの方々の参加を呼びかけます。

### 講演 『蟻の兵隊』として今考えること

講師 森原 一氏 (元『蟻の兵隊』隊員)

日時 12月22日(金) 18:00~19:30

場所 文法経 講義棟 203号教室

#### [ 日本軍山西省残留問題 ]

終戦当時、中国の山西省にいた北支派遣軍第一軍の将兵59000人のうち、2600人が、ポツダム宣言に違反して武装解除を受けることなく中国国民党系の軍閥に合流。戦後なお4年間共産軍と戦い、約550人が戦死、700人が捕虜となった。もと残留兵らは、当時戦犯だった軍司令官が責任追及への恐れから軍閥と密約を交わし、「祖国復興」を名目に残留を画策したと主張。一方、国は「自らの意志で残り、勝手に戦争を続けた」とみなし、元残留兵らが求める戦後補償を拒みつづけてきた。2005年、元残留兵らは軍人恩給の支給を求めて最高裁に上告した。

## 映画『蟻の兵隊』 あらすじ

今も体内に残る無数の砲弾の破片。それは“戦後も戦った日本兵”という苦い記憶を奥村和一（おくむら・わいち）（80）に突きつける。

かつて奥村が所属した部隊は、所属した部隊は、第二次世界大戦後も中国に残留し、中国の内戦を戦った。しかし長い抑留生活を経て帰国した彼らを待っていたのは逃亡兵の扱いだ。世界の戦争史上類を見ないこの“売軍行為”を、日本政府は兵士達が志願して勝手に戦争を続けたとみなし黙殺したのだ。

「自分達は、なぜ残留させられたのか？」真実を明らかにするために中国に向かった奥村に、心の中に閉じ込めてきたもう一つの記憶がよみがえる。終戦間近の昭和 20 年、奥村は“初年兵教育”の名の下に罪のない中国人を刺殺するよう命じられていた。やがて奥村の執念が戦後 60 年を過ぎて驚くべき残留の真相と戦争の実態を暴いていく。

これは、自身戦争の被害者でもあり加害者でもある奥村が、“日本軍山西省残留問題”の真相を解明しようと孤軍奮闘する姿を追った世界初のドキュメンタリーである。

## 『蟻の兵隊』 感想文（続）

『蟻の兵隊』上映会の時に寄せられた感想文は、『通信』第 2 号でも一部掲載しましたが、そのとき紙面の都合で載せられなかったものを以下に掲載します。尚この感想文は、11 月 5 日(日)のみで、11 月 4 日には、こちらの準備不足で実施できませんでした。書きたい方もおられたと思います。お詫び致します。また、ところどころ分りにくい表現もありますが、お許してください。

戦争になると一人一人がどう考え、どう行動するかという自由がなくなるので、恐ろしいと思った。自分達が別のことをすることが許されない。決められたことは自分の考えに反しても行なわなければならないという意味では、今の日本にもその芽があり、怖いことだと思う。（みんな一緒。異なるものを認めないなど。）

今日は、母と一緒にこの映画を観させて頂きました。とても高齢な方なのに、体も弱くなっている中で、怒りをずっとこらえてきた方の力強さを見せてくれて、人間の力はすごいなーと感じさせる映画でした。

弱いものが、いつも切り捨てられる時代、またそのような時代に近づきつつある不安があります。今は、また戦前のあの時のような世の中になりつつあるような気がします。人の命、人の人権が大切にされないあの時代を二度と再来させないように。子ども達を守る使命がわれわれ大人にはあります。

父を観ているようでした。父は 10 年前に亡くなりましたが、戦時中ポタン江省の方で大隊を率いていたそうです。初年兵の教育として奥村さんが経験されたことを、父は命令していたのかと思いました。(59 歳、女性)

戦争、殺す殺されるという面だけでなく、百人いけば百通りの見方があることを知らせてくれました。

奥村さんの執念、闘いが、心に強く残りました。最後の「棄却」の文字に怒りをおぼえざるをえませんでした。

#### 蟻の兵隊を思う

戦争は戦いである。しかも国と国との・・・

国民を守る為のものとして確認されて、

戦いであるから・・・なんでもありで、勝つためにはルールなしとなるのであろう。

そして兵士は、殺人マシン化するのである・・・か！

どこの国でも、どこの国とも、戦争のない、しない国づくりに一人一人が取り組まねばならない。どちらにも、国の義はない。

善良な一市民も鬼になる、殺人マシンになるのが戦争ダ！あらためて思う！

良い機会を与えてくれて、ありがとうございました。

一人でも多くの人に見てもらいたいと思う。軍隊はいらない。殺す訓練より救う訓練を。

過去に自分が、強制されたとはいえ、行なった殺人について知りたいと思い中国へ行き、その事実を正直に中国人に伝える奥村氏の勇気に驚いたし、見習いたい。自分の心を助けたいため・・・！？

人は何でも出来るが、それは個人(自分またはある個人)の為であってはならないと思う。

16歳で日本軍に強姦された女性が奥村さんに、「もう、話せばいいのに・・・。隠すことではない」と言っていた場面でもとても心が安らぎました。私の義父(89歳)は、南方に10年行ってました。でも、当時の話は一切しません。父から学ばなくてはならないことがいっぱいあるはずなのに、私からも聞いたことがないと。あらためて時間がないのだと思いました。戦争は人を変える。だけど戦争から学んだことを日本人として世界へ広げなければならぬ。当時の間違いを認めよう。

父も満州へ行っていらしいが、戦争の話はあまり聞いたことがない。この年代の人たちは、その心の深いところに、はかり知れない重荷を背負っているのではないか。裁判については、原告があまりに高齢の為、正当なものにはなりえない。マスコミがあるいは若い弁護士が必要。

終戦後も、中国で戦った残留日本兵がいたこと、そうした兵隊に国の補償がなされていないことを、この映画で初めて知りました。

失われた尊厳を取り戻したいと願う奥村さんや他の元日本兵の気持ちと、戦後処理をキチンと終わらせないまま済ませている日本の政府の姿が見える。非常に良い映画だと思いました。

こうした映画に、劇場公開の場がなかなか与えられない日本のジャーナリズムの現状にとっても腹立たしさを感じます。

軍として戦わされ、残されながら、なんら補償もされない。この軍、戦いは何だったのか、何の為死んだのか。一部の人がだました。天皇を騙ってだました。許されないことである。二度と戦争を起こしてはならない。

終戦後に中国に残留して戦争を続けていた人がいたなんて知らなかった。この映画を沢山の人に観てもらって、この事実を風化させずに、後世に伝えていかなければならないと思った。

雑誌の『世界』で、この映画のことを知り、ぜひ観たいと思っていました。一言で映画の感想を述べられませんが、戦争を語り継ぐ世代として、よい映画を観させていただいたと思っています。ありがとうございました。(29歳、男)

実際は上官の命令で残留させられたのに、志願して残ったのだとされ、戦後も命をかけて国体の再興(?)のために戦わされていたにもかかわらず、日本政府はその事実すら認めることもない。また、当時の命令を下した上官なるものは、命令を下した部下を見捨てて自分だけ日本に帰り、いけしゃーしゃーと勝手に残ったのだと言っていることに怒りを感じた。

今、未履修問題が問題となっている高校現場と私はダブってしまった。未履修をさせて、それを容認していた校長、県教委、文科省は責任もとらず、すべて現場の教員に負担がいつていることと、

侵略の=を直視しつづけようとする奥村さんの姿勢はすごいと思った。(教員)

年老いてなお、戦争の真実を明らかにし、国家司法の不条理を暴いていく姿には頭が下がります。この真実を明らかにしていくことによって本当の戦争の姿を後世に伝えていくは今最も大切なことだと実感しました。とりわけ、戦争を戦った人が老いをおして立ち上がることこそ説得力もあり、切実な叫びとして受けとめることが出来ます。是非この映画を若い人たちに観てもらおうような運動が興ればよい。(66歳、元教員)

追伸 靖国神社の境内での若い人たちの反応が面白くもありましたが、私達世代の力不足のもたらしたものとも思えて、恥じ入る次第です。

観ていて辛かった。やはり日本という国は戦争に対してなかなか目を開こうとしない。自浄力のない国だということが、ところどころで露呈していて、失望せざるをえなかった。私たちはあまりにも知らなすぎる。歴史をさらっただけで、真ん中のあたりを学ばない。戦争というものをある意味では学んでいない。教科書にも書いてないし、先生から教えてもらうこともない。ただただ、それが不思議だ。

わざわざ、中国に残留させて、兵隊を戦わせたという真実も知らなかった。「鬼」のような(鬼の)軍隊であったことも学ばなかった。これから知らない人が増えていくことが心配だ。

日本兵に強姦された女性が奥村さんを励ます姿に涙がこぼれました。素晴らしい方だと思います。うらみもあつたでしょう。日本兵は憎いでしょう。それなのに、もと日本兵を励ます。私には出来ません。

中国で死んだ戦友の姿を思い出して涙をこらえて声を荒げているところも印象深かったです。とてもよい映画でした。・・・涙が。うう・・・。

戦争を知らない若い人々にぜひ観てもらいたいです。

最近、一部の大臣が核兵器を持つ論議をするべきだと言い始めています。また、ここ何代かの防衛庁長官は、まるで兵器マニアか軍事オタクではないかと思われるような者ばかりです。どの人も、自らは本当の戦争を体験していない世代です。その意味では 50 代も 30 代も 10 代の若者も変わらないのです。

本当に戦争を知っている世代は、大部分の人は口をつぐんだまま死んでいくのでしょうか。一部は、軍服を着て靖国を参拝したり、小野田さんのように、あの戦争やそれに参加した自分達の青春を美化しているのでしょうか。

そして、ごくごく一部の奥村さんのような人達だけが、あの戦争を暴き裁こうとしている。同時に自らをも裁くことになるのに。

口を開かない大部分の人たちから、私たちは、どうやって戦争の真実を引き出せばよいのか。(金沢市)

上官(司令官)が戦犯を免れる為に部隊を売るなどというのは「日本軍」自体の醜い本質をあらわにしたものである。

殺人マシンとされた奥村さんが、中国=殺人現場までたずねて、自分自身と日本軍のぬぐいがたい犯罪と真正面から向き合う場面には鬼気迫るものがありました。

戦前、国家権力の一部として戦争に加担した裁判所=司法権力がそれを隠蔽することに強い憤りを感じます。

#### [ 編集後記 ]

今回は、『蟻の兵隊』の特集号ということで、お届けします。まだ映画をご覧になっていない方は、インターネット等で検索すると、色々なところの上映会の予定が分ります。是非一度ご覧になられるようにと、お薦めいたします。戦後 61 年。80 を越えてもただひたすら巨大な国家権力と戦いつづける奥村さんたち、元『蟻の兵隊』の人たちには、ただただ頭が下がります。それにしても、あんなやりたい放題の政府を許しているのがわれわれ国民だというのは、恥ずかしくなります。来年はどんなニュースをお伝えすることになるのか、怖い気がします。(山辺)